

近年のシロイチモジヨトウの多発要因 ～防除の実際と現場の課題～

京都府農林水産技術センター 生物資源研究センター **徳丸晋** **徳丸晋** **徳丸晋** **徳丸晋**

はじめに

シロイチモジヨトウ *Spodoptera exigua* (Hübner) (チョウ目: ヤガ科) は、ヨーロッパ、アフリカ、中国、東南アジア、北アメリカなどの亜熱帯から温帯にかけて生息し(堀切, 1986; 吉安ら, 1995), 幼虫が主にテンサイやワタを加害する(堀切, 1986)。我が国では1960年代に初めて九州地方のテンサイで多発し, 1980年代には鹿児島県(堀切, 1986)や高知県(高井, 1988)のネギにおいて多発し, さらにトルコギキョウ, カーネーションなどの花きを加害し, その被害が問題になった(高井, 1988)。

京都府において本種は, 1983年ごろから主にネギで多発したが(吉安ら, 1995), 1995年ごろから本種に対する交信攪乱剤を用いた防除が広域的に行われたため, 1990年代後期からはほとんど見られなくなった(徳丸,

2017)。しかし, 2016年ごろからネギ(図-1), キャベツなどにおいて, 本種の発生が再び目立ち, 一部のネギ圃場では圃場全体が白化し(図-2), 収穫放棄する被害が見られた。

本稿では, 近年全国的に多発傾向が続くシロイチモジヨトウの多発要因と本種に対する生産現場での防除の実際と課題について紹介する。

本文に先立ち, 生産現場における本種に関する一連の情報を賜ったJA京都中央の新谷雅敏および齊藤 篤の両氏に感謝申し上げます。京都府農林水産技術センター海洋センター(当時)の上野陽一郎氏, ならびに京都府農林水産部農産課(当時)の神崎美鈴および三野大輔の両氏には, 非農耕地でのフェロモントラップの調査に協力いただいた。京都府病害虫防除所の職員には, シロイチモジヨトウの巡回およびフェロモントラップ調査データを提供いただいた, これらの方々にも厚く御礼申し上げます。



図-1 シロイチモジヨトウ幼虫(左)とネギの被害株(右)

Factors Contributing to the Recent Outbreak of *Spodoptera exigua*: Current Control Measures and Challenges in the Field.

By Susumu TOKUMARU

(キーワード: シロイチモジヨトウ, 防除, 薬剤感受性, 交信攪乱剤, 長距離飛来, ネギ)